

5) 仙波純一 (さいたま市立病院), 松浦雅人 (東京医科歯科大学), 中山和彦, 宮田久嗣監訳. 精神薬理学 エッセンシャルズ: 神経科学的基礎と応用. 第3版. 東京: メディカルサイエンス・インターナショナル, 2010.

## V. その他

- 1) 中山和彦. 不安障害. げんき 2010; 秋: 9.
- 2) 中山和彦. 「生活の質」を高めるために その54: 弱っているひとに対する心づかい. ともしび 2010; 9: 14-5.
- 3) 中村 敬. 森田療法と認知療法. 精神療法 2011; 37(1): 80-1.

## 小児科学講座

教授: 井田 博幸	先天代謝異常
教授: 白井 信男	小児腎臓病学
教授: 星 順隆 (輸血部に向向)	小児血液腫瘍学, 輸血学
教授: 大橋 十也 (DNA医学研究所に向向)	先天代謝異常
准教授: 宮田 市郎	小児内分泌学
准教授: 勝沼 俊雄	小児アレルギー学
准教授: 和田 靖之	小児感染免疫学
准教授: 加藤 陽子 (輸血部に向向)	小児血液腫瘍学
准教授: 浦島 充佳 (臨床研究開発室に向向)	臨床疫学
准教授: 斉藤 和恵	小児臨床心理学
講師: 藤原 優子	小児循環器病学
講師: 斎藤 義弘	小児感染免疫学
講師: 田知本 寛	小児アレルギー学
講師: 小林 博司 (DNA医学研究所に向向)	先天代謝異常
講師: 秋山 政晴	小児血液腫瘍学
講師: 布山 裕一	小児循環器病学, 新生児学
講師: 小林 正久	先天代謝異常, 新生児学
講師: 浦島 崇	小児循環器病学

## 教育・研究概要

### I. 代謝研究班

代謝研究班における研究対象は (1) 先天代謝異常症 (2) 小児内分泌疾患 (3) 奇形症候群である。(1) に関しては①ライソゾーム病 (LD) の骨髓移植で最低限必要なドナー細胞の割合②LD においてのオートファジー亢進は化学シャペロンで抑制出来る③レンチウイルスが LD の遺伝子治療のベクターとして有用である④抗 CD3 抗体による LD 酵素補充療法における免疫寛容導入には制御性 T 細胞が重要である, 以上を明らかにしたことが主な進捗である。(2) に関しては左心不全ラットを作成し, 脳内での Urocortin 2, 3, Nesfatin 1 およびその受容体の発現動態を明らかにするとともに, 左心不全ラットに hANP の脳室内投与を行い, その前後での Urocortin 2, 3 の発現量の変化を解析した。臨床的研究では成長ホルモン治療中 SGA 性低身長症の経時的な発達の評価および脂質代謝やインスリン抵抗性におけるパラメーターの変動について検討を行った。(3) に関しては様々な遺伝性疾患に対して CGH や MLPA 法などで遺伝子解析を行った。

## II. 神経研究班

神経研究班の研究概要は以下の通りである。

1. 16歳未満発症の急性脳症後遺症 103例の予後を①代謝異常に起因する1例, ②サイトカインストームに起因する24例, ③痙攣重積型68例, ④難治頻回部分発作型5例, ⑤意識障害主体5例に分類し検討した。後遺症は知的障害89.3%, 高次脳機能障害77.7%, てんかん68.9%, 運動障害27.2%の順に多く, 重症度は①②③④⑤群の順に軽度になっていた。高次脳機能障害で注意障害, 視覚認知障害がみられた。

2. 新生児動脈性脳梗塞21例の臨床的特徴を検討した。18例が正期産で, 日齢2以内の発症が多く, 症状は痙攣が52.4%, 呼吸障害が33.3%だった。梗塞は左半球, 中大脳動脈領域が多かった。後遺症は, 運動障害8例, 知的障害5例, てんかんが3例であった。

## III. 血液腫瘍研究班

進行期網膜芽細胞腫に対する眼球温存治療を国立がん研究センター中央病院眼腫瘍科と共同で行っている。眼球温存率を改善させるための基礎研究として, ヒストン脱アセチル化酵素阻害効果をもつバルプロ酸 (VPA), デブシペプチド (FK228) が網膜芽細胞腫細胞株 (Y79, WERI-Rb1) において放射線増強効果を持つことを明らかにした。その機序として, VPAとFK228は放射線によるDNA傷害をより強く引き起こすこと, この時p53はリン酸化 (Ser46) とアセチル化 (Lys382) を同時に受けることにより安定化し, p53の発現が増加することにより放射線増強効果が起きている可能性が考えられた。また, 小児腫瘍・血液疾患の患者に対して, 包括医療としての緩和医療を提供すべく, その課題に取り組んでいる。医学部5年生の臨床実習で小児緩和医療のクルズスを行い, その有用性と課題について発表した。

## IV. 感染免疫研究班

感染免疫研究班では, PCR法を用いた病原微生物の同定ならびに遺伝子解析, 原発性免疫不全症の遺伝子診断ならびに遺伝子治療, 免疫・生体防御反応の解析を主な研究テーマとしている。

1. PCR法を用いた病原微生物の同定ならびに遺伝子解析

multiplex-PCR法を用いた小児炎症性疾患における原因細菌遺伝子の検出を行っており, 従来の培養同定法に代る検査法として期待されている。また

real-time PCRを用いてヘルペス属のウイルス定量を行い, 病態に適した治療法の選択に役立っている。その他, 呼吸器ウイルス感染症の分子疫学解析も行っている。

2. 原発性免疫不全症の遺伝子診断と遺伝子治療  
慢性肉芽腫症に対する *ex vivo* 遺伝子治療の準備を進めている。

3. 免疫・生体防御反応の解析

小児リウマチ性疾患の疾患活動性や予後の評価, 難治例に対する生物学的製剤による治療効果や安全性について臨床研究を行っている。

## V. 腎臓研究班

腎臓研究班では小児特発性ネフローゼ症候群の臨床的検討, 先天性後部尿道弁の予後規定因子, 乳児尿路感染症の管理法など臨床に役立つテーマをもち研究を進めている。その他レアなケースの症例報告を全国レベルの学会で発表している。若い班員が多く, 研究期間も短くまだ大きな成果をあげていないものも多い。しかし小児特発性ネフローゼ症候群の臨床的検討, 先天性後部尿道弁の予後規定因子については学会誌に採用され, 研究の成果は徐々に実を結び始めている。

## VI. 循環器研究班

小児循環器研究班では臨床, 基礎研究の双方より小児循環器の病態解析を行い日本小児科学会, 日本小児循環器学会を中心に研究報告を行っている。基礎研究では科研費を獲得し右心不全モデルラットを使用した右心不全の病態解析から telmisartan が不全右心において抗線維化作用から心機能を維持することを明らかにし, さらにアポトーシスと右心不全の関連性についての検討を行っている。また国内に先駆けて Copy number variant と先天性心疾患の関連性を網羅的に検討している。臨床研究では先天性代謝疾患に合併する心病変の酵素補充療法による治療効果を検討し Fabry 病では早期の治療開始によって大動脈弁輪拡大, 心筋肥大の抑制効果が得られる可能性を明らかにした。ムコ多糖症 II 型では心筋肥大の進行を防ぐために酵素補充の早期開始が重要であることが明らかになった。近年, 小児の心不全の原因疾患として注目を浴びている左室緻密化障害において発症者の遺伝子検索により TPM1 が新たな左室緻密化障害の原因遺伝子になりうることを明らかにした。また胎児診断の普及によって多くの先天性心疾患が診断されるようになり, それに伴う家族へのフォロー体制の構築が重要な研究課題と

なっている。

#### 「点検・評価」

当講座の大きな特色は小児科学のほぼ全ての領域を網羅する専門研究班を兼ね備えている点であり、各研究班は通常の診療業務をこなすだけでなく、日々臨床研究や基礎研究も押し進めている。本年度の評価としては、昨年度よりも原著論文が英文、和文ともに増加傾向にあり、業績面で着実に成果が上がっていると考えられる。

そこで各研究班の点検・評価に目を向けてみたい。まず代謝研究班は先天代謝異常・内分泌・先天奇形といった多彩なサブグループから構成されており、それぞれの分野で独創的な研究が進行中である。若手班員も徐々に増えてきており、各グループの特性を生かした教育体制も整いつつある。英文での原著論文もコンスタントに発表している。神経研究班は急性脳症後遺症の予後や新生児動脈性脳梗塞の臨床的特徴をテーマとした臨床的な研究を行っている。本年度も例年通りに英文で複数の原著論文を発表しており、その継続性は高い評価に値する。血液腫瘍研究班は高いモチベーションを維持しつつ、日々の臨床に励みながら研究にも真摯に取り組んでいる。大学では若い医師に対する専門教育もしっかり行われている。日常臨床が忙しいにもかかわらず、昨年度より原著論文が増えている点は高く評価される。感染免疫研究班では先端研究として先天性免疫不全に対する遺伝子治療の研究が行われ、英語論文も出ており、高い activity が維持されている。また、PCR法を用いた病原微生物の同定や小児リウマチ性疾患の活動性や予後の評価といった小児科臨床に即した意義深い研究も行われている。腎臓研究班は主に若い班員で構成されているが、学会発表を精力的に行っている。和文での論文発表もみられ、少しずつ研究成果が実を結び始めており、今後の躍進が期待される。最後に循環器研究班は臨床的貢献度が高く、若手医師に対する専門教育も充実している。研究面において右心不全ラットを用いた基礎研究が進行中であり、今年は国際学会での発表も行われた。以前は学会発表の論文化が当研究班の課題であったが、最近では和文による原著論文の発表が少しずつ出て来ており、これからの進展が大いに注目される。

総括すると、本年度は講座活性化に向けて若い医局員に対する教育・研究体制が整備され、それに伴い成果も徐々に現れてきていると言えよう。今後はより Impact Factor の高い英文雑誌への accept を目標に講座全体で step-up していくことが必要であ

る。

#### 研究業績

##### I. 原著論文

- 1) Kobayashi H, Shimada Y, Ikegami M, Kawai T, Sakurai K, Urashima T, Ijima M, Fujiwara M, Kaneshiro E, Ohashi T, Etoh Y, Ishigaki K, Osawa M, Kyosen SO, Ida H. Prognostic factors for the late onset Pompe disease with enzyme replacement therapy: from our experience of 4 cases including an autopsy case. *Mol Genet Metab* 2010; 100(1): 14-9.
- 2) Tajima A, Ohashi T, Hamano S, Higurashi N, Ida H. Gaucher disease patient with myoclonus epilepsy and a novel mutation. *Pediatr Neurol* 2010; 42(1): 65-8.
- 3) Kyosen SO, Iizuka S, Kobayashi H, Kimura T, Fukuda T, Shen JS, Shimada Y, Ida H, Eto Y, Ohashi T. Neonatal gene transfer using lentiviral vector for murine Pompe disease: long term expression and glyco-gen reduction. *Gene Ther* 2010; 17(4): 521-30.
- 4) Hamano S, Higurashi N, Koichihara R, Oritsu T, Kikuchi K, Yoshinari S, Tanaka M, Minamitani M. Interictal cerebral blood flow abnormality in cryptogenic West syndrome. *Epilepsia* 2010; 51(7): 1259-65.
- 5) Kikuchi K, Hamano S, Goto F, Takahashi A, Ida H. Epileptic focus in a case of subcortical band heterotopia: SISCOM and ictal EEG findings. *Epilepsy Seizure* 2010; 38(1): 192-8.
- 6) Higurashi N, Hamano S, Yoshinari S, Tanaka M, Ida H. Nonthalamic generalization of Ictal spikes in atypical absence seizures. *Pediatr Neurol* 2010; 43(2): 131-4.
- 7) Yamaoka M, Akiyama M, Yuza Y, Yokoi K, Yokokawa Y, Matsushima S, Fujigasaki J, Chiba S, Kohno M, Ida H. Disseminated *Absidia corymbifera* infection in a 14-year-old girl with Burkitt lymphoma (Stage IV). *日小児血液会誌* 2010; 24(1): 43-6.
- 8) Kawano T, Akiyama M, Agawa-Ohta M, Mikami-Terao Y, Iwase S, Yanagisawa T, Ida H, Agata N, Yamada H. Histone deacetylase inhibitors valproic acid and depsipeptide sensitize retinoblastoma cells to radiotherapy by increasing H2AX phosphorylation and p53 acetylation-phosphorylation. *Int J Oncol* 2010; 37(4): 787-95.
- 9) Goto-Sugai K, Tsukagoshi H, Mizuta K, Matsuda S, Noda M, Sugai T, Saito Y, Okabe N, Tashiro M, Kozawa K, Tanaka R, Morita Y, Nishina A, Kimura H. Genotyping and phylogenetic analysis of the major genes in respiratory syncytial virus isolated from in-

- fants with bronchiolitis. *Jpn J Infect Dis* 2010; 63(6): 393-400.
- 10) Kawai T, Kusakabe H, Seki A, Kobayashi S, Onodera M. Osteomyelitis due to Trimethoprim/Sulfamethoxazole-resistant *Edwardsiella tarda* infection in a patient with X-linked chronic granulomatous disease. *Infection* 2011; 39(2): 171-3.
- 11) 平野大志, 藤永周一郎, 遠藤 周, 西崎直人, 金井宏明, 大友義之, 小林堅一郎, 多田 実, 白井信男, 井田博幸. 先天性後部尿道弁の46例 長期腎機能予後規定因子の検討. *日小児腎臓病会誌* 2010; 23(2): 128-32.
- 12) 平野大志, 藤永周一郎, 西崎直人, 金井宏明, 中井秀郎, 白井信男, 井田博幸. 先天性後部尿道弁が原因と考えられた腎破裂および尿性腹水の1例. *日小児腎臓病会誌* 2010; 23(2): 196-201.
- 13) 平野大志, 西崎直人, 金井宏明, 原 聡, 大友義之, 海野大輔, 藤永周一郎. 国際法に従い初期治療を行った小児特発性ネフローゼ症候群の臨床的検討. *日腎会誌* 2010; 52(8): 1029-36.
- 14) 小川 潔, 飯島正紀, 伊藤怜司, 河内貞貴, 菅本健司, 菱谷 隆, 星野健司. 小児期心疾患に対する抗血小板薬 ticlopidine の有用性と安全性についての検討. *日小児循環器会誌* 2010; 26(5): 400-6.
- 15) 伊藤怜司, 飯島正紀, 菅本健司, 菱谷 隆, 星野健司, 小川 潔, 清水健司, 大橋博文. 複雑心奇形を合併した Peter's-Plus 症候群の2例. *日小児会誌* 2010; 114(10): 1572-6.
- 16) 松井猛彦, 岩田 力, 勝沼俊雄, 南部光彦, 岡田賢司, 近藤直実, 小児喘息・アレルギー患者の新型インフルエンザ対応ワーキンググループ(WG). 新型インフルエンザ入院例に関する緊急第二次調査報告 基礎疾患のない症例との比較 呼吸器症状を呈した症例を中心に. *日小児アレルギー会誌* 2010; 24(1): 155-66.
- 17) Sato S, Tachimoto H, Shukuya A, Kurosaka N, Yanagida N, Utsunomiya T, Iguchi M, Komata T, Imai T, Tomikawa M, Ebisawa M. Basophil activation marker CD203c is useful in the diagnosis of hen's egg and cow's milk allergies in children. *Int Arch Allergy Immunol* 2010; 152 (Suppl. 1): 54-61.
- 18) Ito Y, Adachi Y, Itazawa T, Okabe Y, Adachi YS, Katsunuma T, Miyawaki T. Comparison of exhalation time methods (6 sec vs. 10 sec) of a hand-held exhaled nitric oxide analyzer. *Pediatr Pulmonol* 2010; 45(10): 1005-8.
- 19) 横川裕一, 秋山政晴, 横井健太郎, 湯坐有希, 大橋伸介, 桑島成央, 芦塚修一, 吉澤稔治, 井田博幸. 生検による診断が困難であった嚢胞成分の乏しい solid pseudopapillary tumor の1例. *小児がん* 2010; 47(2): 302-6.
- 20) 菊池健二郎, 浜野晋一郎, 小一原玲子, 折津友隆, 田中 学, 南谷幹之, 井田博幸. 小児けいれん重積およびけいれん頻発における静注用 phenobarbital の有効性と安全性. *脳と発達* 2010; 42(4): 304-6.

## II. 総 説

- 1) 井田博幸. 【小児神経・精神疾患臨床のトランジション より良いキャリアオーバーを目指して】代謝遺伝性疾患のキャリアオーバー. *日臨* 2010; 68(1): 19-26.
- 2) 大橋十也. 【臨床遺伝学の進歩と日常診療】遺伝性疾患の新しい治療と今後期待される治療研究 ラインゾーム蓄積症と酵素補充療法. *日医師会誌* 2010; 139(3): 621-4.
- 3) 栗原まな. 【小児神経・精神疾患臨床のトランジション より良いキャリアオーバーを目指して】小児期から成人期への臨床経過とその経年的なマネージメント神経疾患 外傷後高次脳機能障害. *日臨* 2010; 68(1): 63-8.
- 4) 栗原まな. 【急性脳炎・脳症】急性脳症の予後. *日臨* 2011; 69(3): 541-4.
- 5) 栗原まな. 小児救急医療と小児リハビリテーション医療の連携. *小児科*. 2010; 51(12): 1711-7.
- 6) 加藤陽子. 【小児の治療指針】血液・腫瘍 緩和医療. *小児診療* 2010; 73(増刊): 485-6.
- 7) 加藤陽子. 【鉄代謝の臨床 鉄欠乏と鉄過剰 診断と治療の進歩】鉄欠乏 小児と思春期の鉄欠乏性貧血. *日内会誌* 2010; 99(6): 1201-6.
- 8) 和田靖之, 久保政勝. 【これだけは知っておきたい検査のポイント】免疫学的検査 感染関連検査〈ウイルス関連検査〉風疹ウイルス, 麻疹ウイルス. *Medicina* 2010; 47(11): 387-99.
- 9) 河合利尚. 間質性肺炎と縦隔気腫を合併した若年性皮膚筋炎. *小児リウマチ* 2010; 2(1): 42-6.
- 10) 小川 潔. 【心筋・心膜疾患の up to date】急性心筋炎退院後の生活運動管理. *小児内科* 2010; 42(5): 789-91.
- 11) 菱谷 隆, 小川 潔. 地域の産科と小児医療センターとの間に胎児超音波遠隔診断システムを構築して医療の向上をめざす. *医事新報* 2010; 4513: 90-2.
- 12) 勝沼俊雄, 海野浩寿, 飯倉克己人. 【これだけは知っておきたい気道疾患の最新診断検査法】喀痰・血液検査 呼気凝集法. *小児診療* 2010; 73(10): 1759-62.
- 13) 海老澤元宏. 食物アレルギー経口負荷試験ガイドライン 2009 解説 (第IV章) 食物経口負荷試験の方法 (1~5). *日小児アレルギー会誌* 2010; 24(3): 349-58.

- 14) 勝沼俊雄：【新しい喘息予防・管理ガイドライン】長期管理における段階的治療 小児. Medico 2010；41(9)：284-7.
- ### Ⅲ. 学会発表
- 1) Yokoi T, Kobayashi H, Eto Y, Ohashi T, Ida H. Chimerism of bone marrow reduces the glycolipid storage in Fabry disease mice. Annual Symposium of the Society for Study of Inborn Error of Metabolism. Istanbul, Sept.
- 2) Miyata I, Ono E, Matoba K, Motoki T, Ida H, Tojo K, Ito J, Yamada S. Diagnostic usefulness of 3.0 tesla brain MRI in Cushing's disease. The 14th International Congress of Endocrinology (ICE 2010). Kyoto, Mar.
- 3) 栗原まな, 小萩沢利孝, 飯野千恵子, 高橋佳代子, 矢嶋 幹, 井田博幸. 急性脳症の長期予後. 第52回日本小児神経学会総会. 福岡, 5月.
- 4) 栗原まな, 小萩沢利孝, 飯野千恵子, 吉橋 学, 安西里恵, 井田博幸. 急性脳症罹患後に発症したてんかんの予後. 第44回日本てんかん学会. 岡山, 10月.
- 5) 松浦隆樹, 南谷幹之, 中島絵梨花, 菅谷ことこ, 菊池健二郎, 田中 学, 井田博幸, 浜野晋一郎. Valproate 投与中にFanconi 症候群を発症した3例. 第44回日本てんかん学会. 東京, 10月.
- 6) Kato Y, Tamaki H, Itoh F, Akiyama M, Ida H. A study investigating the need and impact of pediatric palliative care education on medical students in Japan. 18th International Congress on Palliative Care. Montreal, Oct.
- 7) Akiyama M, Kawano T, Mikami-Terao Y, Yanagisawa T, Ida H, Yamada H. Histone deacetylase inhibitors valproic acid and depsipeptide sensitize retinoblastoma cells to radiotherapy by increasing H2AX phosphorylation and p53 acetylation-phosphorylation. 42nd Congress of the International Society of Pediatric Oncology. Boston, Oct.
- 8) 横井健太郎, 山岡正慶, 横川裕一, 秋山政晴, 井田博幸, 芦塚修一, 湯坐有希. 当院で診断治療に苦慮した乳児神経芽細胞腫の2例. 第26回日本小児がん学会学術集会. 大阪, 12月.
- 9) 和田靖之, 南波広行, 久保政勝, 井田博幸. 小児期発症SLEにおける末梢リンパ球の免疫抑制剤感受性を用いた治療薬選択の試み. 第113回日本小児科学会学術集会. 盛岡, 4月.
- 10) 河合利尚, 土屋朋子, 田村英一郎, 布井博幸, 金ヶ嵩史朗, 小野寺雅史. TAXIScan-FLを用いた慢性肉芽腫症好中球機能解析. 第18回食細胞機能異常症研究会. 東京, 12月.
- 11) 村山静子, 田村英一郎, 河合利尚, 小野寺雅史. 慢性肉芽腫症における非感染性腸炎の合併. 第18回食細胞機能異常症研究会. 東京, 12月.
- 12) 伊藤 亮, 白井信男, 金網友木子, 宿谷明紀. 間質に著明なKP1染色陽性の泡沫細胞の浸潤を認めたIgA腎症の13歳女児例. 第45回日本小児腎臓病学会学術集会. 大阪, 7月.
- 13) 平野大志, 藤永周一郎, 遠藤 周, 西崎直人, 金井宏明, 大友義之, 小林堅一郎, 多田 実, 白井信男, 井田博幸. 先天性後部尿道弁の腎後遺症を防ぐためにできること：当センターにおける22年間の変遷. 第45回日本小児腎臓病学会学術集会. 大阪, 7月.
- 14) 山田哲史, 宿谷明紀, 伊藤 亮, 白井信男, 井田博幸. 生後24カ月未満有熱性尿路感染症において早期の逆行性膀胱造影は必要か？ 第45回日本小児腎臓病学会. 大阪, 7月.
- 15) Urashima T, Ogawa K, Kawachi S, Fujiwara M, Ida H, Eto Y. Nitric oxide-related compound in diseases with irregular pulmonary blood flow. The 3rd Congress of Asia-Pacific Pediatric Cardiac Society. Urayasu, July.
- 16) 藤原優子, 浦島 崇, 齋藤亮太, 河内貞貴, 森 琢磨, 安藤達也, 大橋十也, 衛藤義勝, 中澤 誠. Fabry 病の酵素補充療法の心臓に対する中期遠隔期効果. 第46回日本小児循環器学会総会・学術集会. 浦安, 7月.
- 17) Ebisawa M, Sugizaki C. Prevalence of allergic diseases during first 7years of life in Japan. The 2010 Annual Meeting of the American Academy of Allergy, Asthma & Immunology (AAAAI). New Orleans, Feb
- ### Ⅳ. 著 書
- 1) 斎藤博久. 15. アレルギー性疾患 3. アトピー性皮膚炎. 総合小児科診療のための小児科学レビュー 2010：最新主要文献と解説. 東京：総合医学社, 2010 p.204-8.
- 2) 宮田市郎. 第I章：乳幼児の発育と発達 C. 身体発育の正常と異常. 前川喜平, 落合幸勝編. 乳幼児健診における境界児：どう診てどう対応するか. 東京：診断と治療社, 2010. p.16-24.
- 3) 藤原優子. 第2部：電子コンテンツ(一般運用系) 5. 具体的な疾患ごとのパス 5.4小児科領域：小児肺炎気管支炎. 水流聡子, 棟近雅彦, 飯塚悦功監修. 医療の質安全保証に向けた臨床知識の構造化(1)：患者状態適応型パス [電子カルテおよび病院情報システム搭載版電子コンテンツ 2009年版]. 東京：日本規格協会, 2010. p.149-62.
- 4) 平野大志, 藤永周一郎. 3章：急性腎炎・慢性腎炎

急性糸球体腎炎, 伊藤秀一(国立成育医療研究センター)  
専門編集, 小児科臨床ピクシス 22: 小児のネフローゼと腎炎, 東京: 中山書店, p.78-81.

## 皮膚科学講座

教授: 中川 秀己	アトピー性皮膚炎, 乾癬, 色素異常症
教授: 上出 良一	光線過敏症, アトピー性皮膚炎, 皮膚悪性腫瘍
教授: 本田まりこ	皮膚ウイルス感染症 (ヘルペスウイルス感染症, ヒト乳頭腫ウイルス), 性感染症
助教授: 石地 尚興	皮膚リンパ腫, ヒト乳頭腫ウイルス感染症, 皮膚アレルギー学
講師: 太田 有史	神経線維腫症
講師: 竹内 常道	光皮膚科学
講師: 川瀬 正昭	ヒト乳頭腫ウイルス感染症
講師: 佐伯 秀久	アトピー性皮膚炎, 乾癬
講師: 松尾 光馬	ヘルペスウイルス感染症

### 教育・研究概要

#### I. 乾 癬

乾癬治療の選択肢が増えてきている。ステロイド外用剤と活性型ビタミン D<sub>3</sub> 製剤を用いた外用療法は治療の基本となる。内服療法としてシクロスポリン MEPC, エトレチネートがあり, さらにスキンケア外来では全身照射型の Narrow-band UVB, 308nm excimer lamp を設置し, 現在, 積極的に光線療法を行っている。また, 2010 年 1 月から生物学的製剤である完全ヒト型化およびキメラ型の TNF- $\alpha$  抗体のアダリムマブ, インフリキシマブが認可され, 難治性乾癬患者への使用が開始された。当院では現在, アダリムマブは 50 例以上, インフリキシマブは 30 例以上の患者に使用されている。

治療法の選択には疾患の重症度に加え, 患者の QOL の障害度, 治療満足度を考慮することが重要である。そのために我々が作成した乾癬特異的 QOL の評価尺度である Psoriasis Disability Index の日本語版を応用し, 患者 QOL の向上に役立てている。また, 乾癬患者に多いとされるメタボリック症候群に対しても精査を行い, 高血圧, 高脂血症の治療も合わせて行っている。また, 効果の高いと考えられる生物学的製剤である抗 IL-17 抗体や抗 IL-23p19 抗体の臨床試験を実施している。

乾癬患者を対象として年に 2 回, 東京地区乾癬学習懇談会を医学部 1 号館講堂で開催している。